

県立図書館だより

令和2年10月

青森県立図書館報 第38号

デジタルアーカイブから



『引札：阿部藤太郎』（古島竹次郎，1908）

(https://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/digital/cont/t0679_03.html)

稲刈りに勤しむ恵比寿と大黒天。その笑みは、五穀豊穰を約束しているかのようだ。

目 次

デジタルアーカイブから	1
いざ！学校図書館レスキュー	2～3
蔵書点検のはなし「休館日に何してる？」	4
こどものひろば	5
ご存じですか？この人・この資料	6
ようこそ文学館へ！	7
カウンターからひとこと	8

いざ！学校図書館 レスキュー



県立図書館では、学校図書館を支援するための様々な取組を行っています。
今回は、その主な事業についてご紹介します。

学校図書館アシスト事業プラス

小学校・中学校・県立学校等へ訪問し、学校図書館に携わる方々の様々な疑問やお悩みを解決するためのお手伝いをする「学校図書館アシスト事業プラス」を実施しています。

当事業は、平成21年度から実施しており、昨年（令和元年）度までに約200か所へ訪問しました。



☞先生向け基礎研修の実施
「学校図書館の大切さをお伝えします！」



☞図書館整備の支援
「まずは一緒にやってみましょう！」

当事業は、①訪問アシストと②研修アシストの2つのプログラムで実施しています。

①訪問アシストでは、「本の並べ方や棚の配置について助言してほしい」「どんな本を廃棄・購入すれば良いか教えてほしい」といったお悩みに対し、具体的な助言や情報提供を行ったり、一緒に作業して整備の仕方をお伝えしたりしています。

②研修アシストでは、「学校図書館の基礎・基本を知りたい」「ブックカバーコートフィルムのかけ方を知りたい」といった要望に対し、先生や図書委員の児童・生徒、ボランティアさんなどへの研修を行っています。



各学校へ訪問する際には、市町村立図書館等の職員の方にも同行してもらい、地域みんなで協力・連携して子どもの読書・学習環境を整える関係づくりを行っています。



☞学校長や市町村立図書館等の職員の方を交えての話し合い
「みんなで学校図書館をつくりましょう！」

図書セット貸出サービス

学校での調べ学習や読書活動を支援するため、図書を様々なテーマごとにセットにし、小・中学校、高等学校、特別支援学校等へ貸出しています。

セットに使用している本は、「協力用図書」と言い、学校図書館や市町村立図書館等へ長期に渡って貸出するために用意している本です。現在、協力用図書は約4万5千冊所蔵しています。



市町村立図書館等の職員や学校図書館担当職員等を対象に、各種研修会の開催も行っています。

学校図書館支援研修

日時：9月30日（水） 13時00分～15時30分

会場：青森県立図書館 4階 集会室

テーマ：繋がる学校図書館

ー支援と連携の輪を広げようー

講演：『読みたい・知りたいを応援！

「チーム学校」の一員として』

宮城県松山高等学校

学校司書 大場 真紀 氏

実践報告1：「学校図書館を活用した授業実践」

西北教育事務所 指導主事 原 倫子 氏

実践報告2：「学校図書館支援事業を通して」

むつ市立図書館

主査 佐藤 涼子 氏・奉仕員 松井 美保 氏・奉仕員 米田 恵子 氏

市町村立図書館等の職員や学校図書館担当職員など合わせて51名が参加し、今後の支援・連携のあり方について考えました。



学校図書館シンポジウム

日時：10月28日（水） 10時30分～15時40分

会場：青森県総合学校教育センター 1階 大研修室

テーマ：あおもりの学校図書館をみんなで考えるシンポジウム

～「豊かな学び」を実現するための学校図書館の役割とは～

問合せ
窓口

企画支援課

TEL：017-739-1456

「学校支援」のページはこちらから





蔵書点検のはなし「休館日に何してる？」

当館では、毎年5月と11月に蔵書点検のため、4～8日間休館しています。

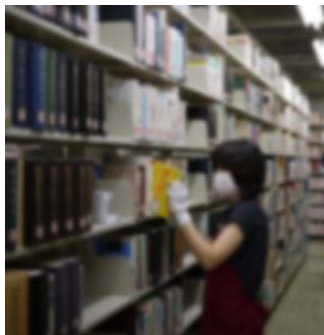
「そんなに長い間何をしているの？」と疑問に思う方もいるのではないのでしょうか。そこで、休館中にどんなことをしているのか、少しだけご紹介します。

蔵書点検とは

蔵書の所在状況を明らかにし、所蔵データに基づいて照合・点検することを蔵書点検といいます。（『図書館用語集 四訂版』より）図書館を運営する上で必要な作業です。

照合・点検作業

1. ポータブル端末機で1冊1冊のバーコードを読み取ります。期間中、蔵書を読み取りますが、大きな本や重い本を取り出すのは特に大変です。
2. 読み取ったデータと所蔵データを照合し、なくなった本がないか、誤って排架された本がないかを確認します。
3. 読み取ることができなかった本が、書架のうしろに入りこんでいないか、他の本にはさまっていないか、何度も確認して見つけ出します。



休館日にしかできないこと、開館準備

蔵書点検以外に、施設設備の点検、職員の研修、大掛かりな本の並べ替え等を行う機会です。

また、休館中の最終日には、ブックポストに返却されたたくさん本を一斉に返却・排架し、開館に備えます。



次回の蔵書点検休館日は、2020年11月26日(木)～12月3日(木)です。皆様に迅速に本を提供し、気持ちよく利用していただくための大切な作業を行いますので、ご理解とご協力をお願いいたします。

こどものひろば



青森市新町商店街のアーケード通りには、各交差点に「しんまち Shopping Street」という看板が吊り下げられています。その上には、鈴木正治さんなど、青森県出身のアーティストの作品が飾られています。青森市内にお住まいの方なら、何度も目にされている看板ではないでしょうか。

旧協働社ビル前の看板に描かれているのは、絵本作家の沢田としきさん（本名：澤田俊樹 1959-2010）の作品です。

沢田さんがこの絵を描いたのは 1997 年 3 月。20 年以上経た今も、新町を歩く人の目を惹きつけます。アーケード側の面に描かれているのは、大地に根をはり、太陽の光を受けて大きく育つ林檎の樹、真っ赤に実った林檎を手取る人の姿、自然の恵みを収穫する人達の喜びを感じさせてくれる作品です。



沢田さんが初めて創作した絵本で、「日本絵本賞」を受賞した『**アフリカの音**』（沢田としき/作・絵 講談社 1996）や、青森県の今別町袋月が舞台となった絵本『**ほろつき 月になった大きいおばあちゃん**』（沢田としき/作 岩崎書店 2001）等の作品は、今も子どもたちに愛され、読み継がれています。

沢田さんは、絵本作家のほかにも、イラストレーター、漫画家、ジンベ^(※)奏者など、幅広いジャンルで活躍し、雑誌のイラスト、コミック、CDジャケットなど、多くの作品を遺しています。

※ジンベ…アフリカの太鼓のことで、ジャンベ、ジェンベともよばれています。

沢田さんが、51 歳という若さで亡くなってから、今年で 10 年。

当館では、沢田としきさんが私たちに遺してくれた作品を展示する「沢田としき没後 10 年展」を 10 月 23 日（金）から開催します。



児童閲覧室では児童書を中心に展示します。

また一般閲覧室企画展示コーナーでは、同時期に描かれた『おおきなポケット』（児童向け雑誌）『すばる』（文芸雑誌）『ぐるり』（東京の地域情報誌）と、分野・作風が大きく異なる雑誌の表紙で、イラストレーターとしての幅の広さを実感することができるほか、コミック作家としてデビューした

頃の作品が掲載された『ガロ』、CDジャケット、ミュージシャンの方との交流やアフリカでの支援活動を紹介する資料を展示します。

沢田さんの作品に触れ、幅広い活動を知っていただければと思います。



「刺し子」は、東北地方の厳しい冬の暮らしの中で生まれた伝統の技で、衣服の強度や保湿性を高めるために布に木綿糸を刺して補強したり、布を数枚重ねたりして、直線や曲線の連続模様をひと針ひと針刺し縫われたものです。

山形県の「庄内刺し子」、青森県の「津軽こぎん刺し」と「南部菱刺し」と種類があり、それぞれ技法と模様の特徴があります。

今回は、「津軽こぎん刺し」と「南部菱刺し」に関する資料をご紹介します。

『コギン』（山端家昌/著 イエティワールド 2019～）

青森市歴史民俗展示館「稽古館」（平成 18 年閉館）に所蔵されていた、貴重な古作こぎん刺し着物の表と裏を撮影して収められた写真集です。現在第 3 巻まで刊行されています。

本書は 1～3 巻それぞれ、「オモテ」と「ウラ」の 2 冊に分かれており、比較しながら図案集とあわせて楽しめるよう工夫されていて、江戸時代から伝わる『古作こぎん刺し着物』の魅力に触れることができます。

『そらとぶこぎん』（津軽書房 2017～）

こぎんの魅力を発信する雑誌で、2017 年に創刊されてから、現在第 4 号まで刊行されています。

先人が遺した技術と思いを守り、次世代へ伝える努力を続けている方々の取り組みや人生にスポットを当てるなど、こぎんに対するこだわりがひしひしと伝わってきます。



『南部菱刺し』（西野和裁菱塾「菱繡館」 2007）

青森県南部地方に伝わる「南部菱刺し」について、明治から平成までのたくさんの作品が写真に収められています。

「南部菱刺し」は、江戸時代から技法が受け継がれていますが、明治時代に多彩色の毛糸が南部地方に入ってきたのをきっかけに、多彩色を組み合わせた華やかな菱刺し模様が展開されていることが分かります。

今回ご紹介した資料は、いずれも館外への貸出が可能ですので、どうぞご利用ください。

ようこそ文学館へ！

近代文学館資料の紹介(第37回)

「ミステリーの魔術師 高木彬光生誕100年展」展示資料から

青森県近代文学館では令和2年10月24日から令和3年1月11日までミステリーの魔術師 高木彬光生誕100年展を開催します。今回は展示資料の中から、江戸川乱歩・横溝正史とかかわりの深い資料2点をご紹介します。

『刺青殺人事件』初版本（昭和23年5月、岩谷書店）

大正9（1920）年青森市に生まれた高木彬光は、昭和22年、占い師の助言で、初めての小説「刺青殺人事件」を書きました。占い師から「大家へ送りなさい」と言われた彬光は、原稿を江戸川乱歩に送りました。こうして「刺青殺人事件」は、江戸川乱歩の眼にとまり、昭和23年5月、「宝石選書」という雑誌の増刊形式で出版されました。無名の新人がいきなり長編を出版するのは当時としては異例のことでした。



この資料、表紙をよく見ると「江戸川乱歩監修」の文字はあっても、著者の名前がありません。彬光は「探偵作家になるまで」（『随筆・探偵小説』収録）の中で、「あわよくば、乱歩先生自身の作品とでも買う方が錯覚を起してくれないかという、涙ぐましいトリックである。」と述べています。『刺青殺人事件』は、出版社の予想を覆し、無名の新人としては異例の三万部を売り上げました。

「新青年」第31巻第5号（昭和25年5月）※「鼠の贅」掲載

『刺青殺人事件』後の彬光は、「能面殺人事件」「妖婦の宿」など傑作を相次いで発表し、昭和25年には探偵作家クラブ賞を受賞しました。その頃、彬光は原稿料がもらえないことがありました。経済的苦境に陥っていた彬光に、短編の書き方を教え、的確な助言を与えて救ったのが横溝正史でした。横溝正史の紹介で、彬光は「月世界の女」や「鼠の贅」などを「新青年」に発表し、窮地を脱したといいます。



本展では、藁半紙に書かれた処女作「刺青殺人事件」の草稿や、江戸川乱歩・横溝正史・山田風太郎と彬光のエピソードをご紹介します。また当館収蔵の400点を超える高木彬光の著書を展示しています。ぜひご覧いただき、この機会に高木彬光作品を読んでいただきたいと思います。入場は無料です。

カウンターからひとこと(第36回)



今回は、当館の**読書バリアフリー**についてご紹介します。

当館では、読書が困難な方や視力の弱い方、また文字が読みづらい方が読書に親しむことのできる読書バリアフリー機器・資料をご用意しています。ぜひ、ご利用ください。

デイジー図書

音声のみの「音声デイジー」と、音声・文字・画像を見ることができる「マルチメディアデイジー」があります。

デイジー図書を使用するには、専用ソフトウェアをインストールしたパソコン・タブレットや専用再生機が必要です。

大活字本

通常の本よりも、大きな文字を使用した本です。

行間を広げたり、文字を大きくして、視力の弱い方や文字が読みづらくなった方にも読みやすいつくりになっています。

音声パソコン

音声とリンクして、画像や写真等を再生することができます。

「マルチメディアデイジー」を含む全ての音声デイジー図書を再生できます。



よみともライト

紙から文章を読み取り、それを音声で読み上げます。

速さの調節ができます。



デイジー図書再生機

デイジー図書のうち、「音声デイジー」を再生するための専用再生機です。

読み上げる声の速さやトーンを調節することができます。



拡大読書器

文字を拡大して、モニターに映し出すことができます。

白黒反転などのコントラストの調節をすることができます。

